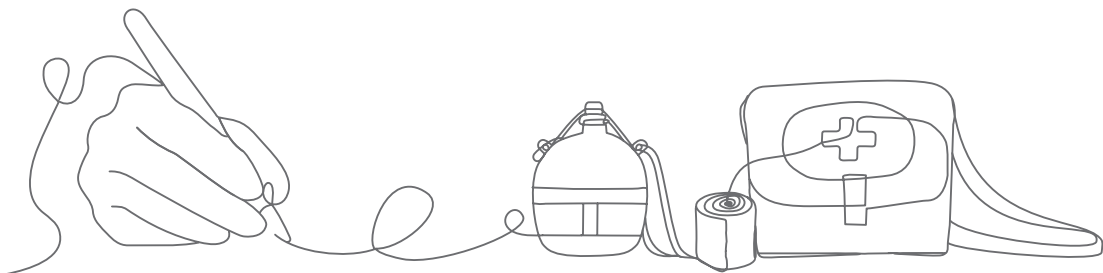


戦傷病者と  
その家族の  
体験記



---

この本は、戦傷病者とそのご家族が書き記した体験記集（『戦傷病者等労苦調査事業報告書』及び『戦傷病克服体験記録』）より、常設展示室「体験者の証言」で紹介しているものを集めたものです。これらの体験記には、戦場での過酷な経験や、怪我や病気と生涯つき合い続けなければならない葛藤、またそれを支えた家族の思いなどが記されており、戦傷病者とそのご家族が戦中・戦後に体験した労苦の一端を知ることができます。彼らの思いを受け継ぎ、語り継ぐための一冊として、ご活用頂きますと幸いです。

令和五年十月

しょうけい館

---

# 戦傷病者とその家族の体験記 〈目次〉

## 戦地へ向けて .....

亀岡 寅雄・愛媛県	「ビルマでの負傷」より	02
岡本 又治・広島県	「傷痍患者部隊の死闘」より	04
樽家 圓一・徳島県	「残しておきたい記録」より	06
米田 幸作・京都府	「おまえの家に牛がいたか」より	08
加藤 菊次・埼玉県	「隻眼となって」より	10
佐藤 勇・岡山県	「生きたことへの感謝か自負か」より	12
桐山 丘・岐阜県	「菩薩に救われて」より	14

## 戦場での受難、治療 .....

高田 勝利・新潟県	「極限状態で軍医殿が煎ってくれた玄米の味」より	18
野上行三・茨城県	「隻脚となったが、心豊かな人生に感謝」より	20
廣田 直記・福岡県	「自立更生への苦勞」より	22
栗田 喜代志・茨城県	「蛆虫に助けられた負傷兵」より	24
原田 昇・大阪府	「傷痍軍人としての体験記」より	26
上本 昭夫・長野県	「海軍少年志願兵として入隊」より	28
北城 良子・沖縄県	「悲惨な沖縄戦」より	30
柳沢 久吉・青森県	「生きていてよかった」より	32
道北 澄子・和歌山県	「救護看護婦の受傷」より	34

植原桂・群馬県	「おじいちゃんの顔の傷」より	36
三浦久良・千葉県	「戦争体験記」より	38
岸本雅利・高知県	「三度の地獄」より	40
三浦一夫・宮城県	「戦中・戦後の労苦を振り返って」より	42
保平長三・三重県	「真実に基づき本質を見抜くために」より	44
嵯峨啓孝・秋田県	「人生を明るくする再出発点となった陸軍病院」より	46

**搬送、戦時下の療養生活**

小林健吾・長野県	「手を失って得たもの」より	49
山口光馬・福岡県	「足が駄目なら」より	50
浅井義信・三重県	「平和の尊さ」より	52
山上幸太郎・東京都	「偏見、差別、迫害」より	54
中島幸一・佐賀県	「失明して」より	56
熊澤正信・愛知県	「最後の花道」より	58
友保たきゑ・岡山県	「涙ながらの二人三脚」より	60

**家族とともに**

千葉ノリ子・岩手県	「夫を家に残して出稼ぎ」より	62
廣瀬正三・奈良県	「傷と職の苦勞」より	66
山中アキ子・大阪府	「戦中・戦後の体験記」より	68
川上アキ子・長崎県	「白衣の妻となりて」より	70

回渕治二・滋賀県	「花と生きる隻腕のど根性」より	74
釜崎幸晴・熊本県	「戦地における受傷の記録」より	76
伊藤テ子・岩手県	「時の流れ」より	78
下松京子・福岡県	「シベリア珪肺」の夫と共に」より	80
小澤茂・鳥取県	「闘病」より	82
松本義夫・石川県	「下半身麻痺となり恩返しできなかった亡父母へ」より	84
中山敬一・静岡県	「戦地における受傷状況と今も続く精神的苦痛」より	86
利根川廣・埼玉県	「再三の病を乗り越えて」より	88
南郷清・広島県	「あぐらをかいた新郎」より	90
足立良彦・岐阜県	「茶碗を持って食べた」より	92
加納静華・熊本県	「全盲でも」より	94
友岡幸子・福井県	「傷痍の夫と共に」より	96
時田民夫・石川県	「片腕人生抄」より	98

体験記の出典（図書館に配架しています）

日本傷痍軍人会（二〇〇〇）『戦傷病者等労苦調査事業報告書』

日本傷痍軍人会（二〇〇〇）『戦傷病克服体験記録』

※体験記の掲載にあたり、旧漢字を常用漢字に、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めている箇所がございます。また、原典の誤字を改めている箇所がございます。

戦傷病者とその家族の労苦を伝える

「戦地へ向けて」





亀岡 寅雄  
(愛媛県)

\* 傷病名 : ..... 左側頸部盲管銃創

\* 受傷年月日/場所 : 一九四五(昭和二十)年三月十四日 ビルマ(ミャンマー)

私は農家の長男として生れ、祖母、父母、弟達の十人家族で農業を営んでいた。

昭和十四年の徴集であったが、徴兵検査一か月位前に青年団の柔道選手として郡大会に出場し、試合中に左手を骨折していたため徴兵検査では補充兵となった。当時としては残念な気持ちが大きかったが、一面ほっとした気持ちのあったこともたしかである。その頃、村には戦死された遺骨が帰って来て村葬が行なわれ、その数も多くなり、戦争の激しさのようなものを感じるようになっていた。又近所の方で中支で片腕をなくされて帰っ

て来られた方がおられ、戦争というのが人ごとでないような、なにか緊張感を覚えるような日々であった。昭和十七年十二月三十一日、明日は正月という日に父と所用で村外から帰り家に着く直前に、弟達が勢いよく走って来るではありませんか、弟達のその緊張感みたいなものを感じて、これは赤紙が来たなと直感した。

「ビルマでの負傷」より

：軍人になることを最高の誉にしていたような気がする。それを又挙げて称賛し励ます親たちであったがその真意はどうだったのか疑わしい節もないではなかった。

：私は男兄弟七人の六番目ですが、皆なが親に似て頑丈な身体だったのが幸いし、決ったように七人全員が次々に検査に合格して兵隊に行くのをさも自慢気に立ち振舞っていた(出発の際に近親者を招待して行う祝宴)父母でしたが、真から嬉しかったのかどうか。戦争も終りに近い頃のこと、七人もの子を軍人に育てた功労に依り国から表彰状を貰ったが、次男(海

軍)は上海事変で傷つき傷痕の身で帰って来たがその傷の悪化で間もなく死亡、五男(海軍)も十九年の夏、南支那海で魚雷にやられ乗船諸共海没したまんまであり、又四男、六男、七男、もいつ帰って来るのやら分らないに「こげなもん貰うて何になる」と言っていたらしいが、それが本音だったのだと思えてならない。

「傷痕患者部隊の死闘」より



## 樽家 圓一

(徳島県)

\* 傷病名 …………… 右下腿擦過症

\* 受傷年月日／場所 …… 一九四五(昭和二十)年五月二十二日 フィリピンルソン島

：時代はもう甲種合格だけが軍隊に行くのではなく、五体満足でなくても少々の障害を持っていてもそれなりに使い道があるので男と生まれたら兵役は免れない、それで若者は皆「お国の為に身命を捧げる」というのが常識でした。従って一旦内地を離れ戦地に赴くには必ず「生還を期せず」と心に誓い合ったものです。

しかしながら私らの出陣する時期には生還を期せずどころか「到着を期し難い」状況にありました。口に出してそう言った記憶があります。

輸送船にして現在のサービス定員からいえば十数倍から二十倍もの兵員と兵器弾薬糧秣等をぎっしり積み込み、船団を組んでのろのろと行くので敵潜水艦の餌食にならないのが不思議です。なんでこんな方法しかないのかと素人目にも思ったことです。

「残しておきたい記録」より

…召集を受け、京都伏見の野砲兵二十二連隊に入隊したときに、「お前の家に牛がいたか。」の質問を受け、「はい」と答えると、「よし。馭車班だ。」と言われ、その日から馬との付き合いが始まった。

…武昌を出て百日余り。毎日毎日の行軍で人も馬もへトへトになっている。ちよつと腰を下すと、すぐウトウトとしてしまう。大休止ともなれば、ぐつすり寝込んでしまうのも無理はない。山を越え、河を渡り、青田の中をジャブジャブ腰まで泥水をかぶり、ふやけた足は寝る前にクリークの水で軍足と共に洗い軍靴を履いたままでない足が入らない。

軍靴の紐を締め、巻脚絆を締め直し馬に鞍を置く。かわいそうに背に手の平大の鞍傷ができ、傷口の膿に蠅が真黒くたかっている。目をつむり鞍を置き腹帯を締め行李を振り分けに積載し「出発用意終り」。

出発の命令で又、今日も行軍だ。我々、兵にはどこへ行くのか分からない。帯剣と手榴弾を腰にさげ、ただ黙々と歩くだけだ。

「おまえの家に牛がいたか」より



## 加藤 菊次 (埼玉県)

\* 傷病名 : ..... 迫撃砲弾破片による右眼部受傷

\* 受傷年月日/場所 : 一九四五(昭和二十)年一月四日 フィリピンレイテ島

…初めのうちは、一か月位でレイテ島の戦闘も終わるようなことを言われていたが、いざ戦地についてみると、私達の考えていたような戦闘では全くなく、到る所で砲撃にあい、又制空権は敵にあり、戦車は大型、銃は連発でどれをとっても比較にならない。食糧も上陸後一週間できなくなり、本当に残念でやりきれない思いでした。第一線ではリモンの先まで転進したものの、前述のような状況で利あらず転進命令が下る。

転進も昼間は不可能の為夜間、それも昼間なら一日もかからない所を、三晩もかかり移動した。そしてオルモックからリモンに通ずる通路との中

間付近に到着する。ここで又砲撃を受け多くの戦死者を出す。

…転進中足等負傷した兵隊は部隊の行動に迷惑をかけないようにとの思いから手榴弾等で自決する者もいた。普通では考えられないことで、これが戦争かと思うとき、戦争の痛ましき恐ろしさを痛感しました。

「隻眼となって」より



## 佐藤 勇

(岡山県)

\* 傷病名 …………… 右上膊爆弾タ片創、同上複雑骨折、右前膊砲弾タ片創、同前膊複雑骨折  
\* 受傷年月日／場所 …… 一九四四(昭和十九)年九月七日 パラオ本島

…比島戦が不利になってからは、味方の支援もなく補給を断たれ洋上の島の上、食い伸しの為にと農耕が始められ、ボーキサイトをふくんだ石だらけの土、まるで草木のない川原並、必死で開墾して、サツマ芋、タビオカ、南瓜が栽培され、又作業班をして食べられるものは何でも集めた。蛇、トカゲ、デングン虫、ナマコ、海岸近くの小魚等、しかし、天気の良い日は定期便がくるので、元気なものでも作業は大変である。

芋畑が広くなると南国の有り難さ、芋を掘ったあと蔓を植えると次が出来、南瓜は種を蒔けばいつでも育つけれど、出来は内地の十分の一も出来

れば良いほう、当然のように畑番が必要となり三畳程の番小屋が出来て、砲台に用のない身は介添いの兵と畑番となる。

月日がたつと共に、栄養失調で餓死者も出るようになる。温情が徒になることもあり辛い日々が続く。共同作業が段々と陰でグループが個人となり、隊は隊で他から食料を譲り受けなければならない。飢餓道の気分をおびてくると交友関係も、むづかしくなる。

「生きたことへの感謝か自負か」より



## 桐山丘

(岐阜県)

\* 傷病名 …………… 右肩胛部同下部迫撃砲弾破片創

\* 受傷年月日／場所 …… 一九四三(昭和十八)年 ソロモン諸島ニュージョージア島

…我々の部隊内では、アメーバ赤痢が蔓延していた。昼尚暗いジメジメしたジャングル内に身をひそめ、最悪の環境下で起居し、人間の食糧らしいもの等口にすることも出来ず、全員が栄養失調であり、皆がマラリア患者であった。そして、終日旋回する敵偵察機やB17爆撃機に身を隠しつつ、第一線の警備や斥候に出勤し、或は何一つ道具のないまま防禦陣地構築の重労働に従事するなど、人力の限界を越えた毎日では、疲労困ぱいの極に達し、既に病気に対する抵抗力など全く失せ、悪疫に勝つことは誰にも出来なかった。

この島に上陸してまだ日の浅い私もアメーバ赤痢に罹患した。腹痛や発熱などはっきりした記憶はないが、夜中たび重なる下痢には悩まされたのを覚えている。(略)病室に何人いたかは知らないが、兎に角、十日程の入室中に私が一番の古参になってしまった。若干は後送者や退室者もいたであろうが、あとは皆死んでしまった。なぜ死んでしまったのか、それはその頃もう前線には何の薬も無かったからである。

「菩薩に救われて」より

戦傷病者とその家族の労苦を伝える

「戦場での受難、治療」





高田 勝利 (新潟県)

\* 傷病名 : ..... 右下肢軟部貫通銃創及び左足蹠骨折貫通銃創  
\* 受傷年月日/場所 : 一九四四(昭和十九)年六月三十日 中国湖南省

：もう一步でクリークに飛び込む寸前、両足を丸太で殴られた様な強烈なショックを受け、頭から落ち込んで行った。何がなんだか分からない。落下の途中柳の細枝につかまり、河に溺れることだけは免れた。下半身は電流に撃たれたように、まるつきり感覚がない。やられた！

：K衛生兵が止血をし包帯を巻いてくれた。もう一人私を助けてくれたのは、仲の良い同年兵のM伍長だった。彼らが私を発見し、弾丸飛び交う中を命懸けで救助してくれなかったら、私は確実に死んでいたであろう。

「ここは敵の目につく、俺にかまわず退ってくれ！」。私は言った。

「がんばれよ！」。言葉を残し、機を伺い一人ずつ後方に退がって行った。私はそれを見届けると、手を伸ばしてオニハスの葉をもぎとり体にかぶせた。こうしていれば敵の目からは逃れられ日除けにもなる。真夏の太陽は未だ高く、陽ざしは射るように暑い。下半身は痺れたように感覚がない。

「極限状態で軍医殿が煎ってくれた玄米の味」より



## 野上行三（茨城県）

\* 傷病名 …………… 右大腿部切断

\* 受傷年月日／場所 …… 一九四二（昭和十七）年六月 ミッドウェー西方海域（駆逐艦荒潮）

…早朝から反復攻撃を受けた重巡三隅は正午遂に撃沈されてしまい、千人近い兵員は海に投げ出されてしまい、私の乗っていた荒潮は、米機が飛び去った合間に手漕ぎのカッターを海へ降して、これら兵員の救助に全力を尽した。そうこうしている中にも米機の攻撃は続き、私は二番砲塔において応戦していたが、米機の機銃弾が右足に当たってしまった。しばらくはそのまま大砲を打ち続けたが、米機のいなくなった合間に前部にある治療所に片足ではねて行った。治療所には多数の負傷者がつめかけ、私は床に横になり治療を待ったが、軍医一人看護兵一人の駆逐艦では中々手当してもら

えなかった。その中出血の為意識が薄れるようになったが、幸いにも血管をしばってもらうことが出来たが、その時は出血多量の為もう立ち上がる力はなくなっていた、それから間もなく、私のいた二番砲塔に爆弾が命中し、残っていた戦友は全員戦死。（略）その後のことは意識が途切れてよく覚えていない。次に気がついた時は、重巡鈴谷の床の上だった。

「隻脚となったが、心豊かな人生に感謝」より

\* 傷病名 …………… 両眼失明

\* 受傷年月日／場所 …… 一九三七(昭和十二年)九月二十一日 中国河北省

：私は河北省滄縣附近の戦鬪に参加していました。私の部隊は鉄道部隊でしたので歩兵部隊の援護を受け、爆破された鉄橋の修復をしていました。その時、敵の攻撃を受け突然体がガンと電気にうたれたようになり、空中に引き上げられるようになったまでは覚えていますが、意識不明になって、何時間、何日間たったのか全く覚えがありません。意識が戻った時は、アンペラの上に寝かされていました。顔中包帯させられていて、自分ではどこを負傷したのか、全く分かりませんでした。昭和十二年九月二十一日午前十一時だったそうです。

数日たって野戦病院の軍医殿の話では、左眼の上に砲弾の破片が当たり左の眼は「飛び出し」なくなっていたそうです。新疆の病院で、軍医殿に右の眼の神経が相通じているので、回復することは難しいと宣告された時は何ともいいようなないショックを受けました。

「自立更生への苦勞」より

：傷は化膿してぐよぐよになっている、衣服に流れ出た汚物から傷口に蛆虫が入りむらがつている。ここには銀バエが沢山おり、卵でなく幼虫を産む。三日もすると大きくなり傷口に匍い込む。負傷して十幾日か過ぎて、傷口から血液がなくなると、創液というのが分泌される。傷口から黴菌が進入するのを防ぐ役目だが、それも化膿する。これが又蛆の餌になる。その繰り返しで回りがべとべと、肛門から男根まで蛆だらけ、傷の中深く入りこんでつく、その痛さは火傷のようだ。苦しいが自分では全々動けない、手を延ばすことも出来ず、蛆のなすがままである。

：病院に着けば蛆だけは取ってもらえると思って我慢して来たが、誰もいない、本当に病院に来たのか疑う位だ。やっと夜半に衛生兵が見廻りに来たが、治療は明日だと言う。蛆虫だけでよいから取ってくれと哀願したが、とても手が廻らないと、にべもない返事である。何も出来ないならば俺を殺して行けと、かみついた。本当に気が狂いそうだった。

「蛆虫に助けられた負傷兵」より



## 原田 昇

(大阪府)

\* 傷病名 …………… 右眼盲管銃創

\* 受傷年月日／場所 …… 一九四四(昭和十九年) ビルマ(ミャンマー)

…戦闘中に、右眼に盲管銃創を受けて倒れた。大きな樹木の多いジャングルの中の戦闘であったので、多分樹木に当たった跳弾が私の小鼻をかすめて右眼に盲管になったのではないかと思われ、もし貫通しておれば即死だった。受傷と同時に全盲の状態となり、頭部を受傷しているので体の平衡がとれず立ち上ることができなかったが、担架もなく兵隊に担がれて後退した。数時間後猛烈な吐き気におそわれ長時間苦しみ、そのまま死ぬのではないかという瀕死の状態に追いこまれたが、悪運強く生きのびることができ、カマインの前のインドージ河の濁流は運よく工兵の鉄舟に助けられて

渡河し、病院とは名ばかりのアンペラの上に收容された。病院内は患者の泣き声叫び声で阿鼻叫喚、軍医の診察もなくほうたい交換してくれたのみ、衛生兵は屍体の処理に悩殺されていた。食べ物はうすくうすめたコンデンスミルクを一日に一回飯盒のふた一杯のみ。

「傷痍軍人としての体験記」より

上本 昭夫 (長野県)

\* 傷病名 …………… 肺結核

\* 発病年月日/場所 …… 一九四五(昭和二十)年六月二十九日 シンガポール

…昭和二十年六月二十九日、百一海軍病院に入院(シンガポール島)。

前年の過酷な艦隊訓練と激しかった会戦の疲労も重なってか、連日高熱と胸痛が続き、左胸膜炎と診断され入院した。

入院後の病院生活でまず感じたことは、自分は戦闘での外傷ではなく、内科疾患による戦病であるという劣等意識に苦しめられたことであった。戦傷者は優者であり、戦病者は弱者であるという雰囲気が多分にあったことを思い出す。

病院といえども前線基地での医療機関だったので、医療面や食糧事情などは大変厳しい状況であった。昭和二十年八月十五日の終戦を病院で知らされる。八月末までに南方軍は陸海軍とも全員英軍の捕虜となった。

敗戦の報に接した時は、それまで信じて疑わなかった国家観や人間の価値観がいつきに崩れていく衝撃に、若い傷病兵たちと声を上げて泣き合ったことを忘れられない。

「海軍少年志願兵として入隊」より

：昭和二十年三月二十三日、沖縄本島に艦砲射撃が始まる。上陸の前触れだと言う。女師一高女の生徒は、その日学徒動員を受け、南風原陸軍病院勤務となる。当時私は、師範学校女子部予科三年であった。

学校から病院までの約六キロの道程を夜歩いて行った。病院に着く。壕は完成していない。昼は壕に隠れ、夜は壕掘りだった。

四月一日敵上陸、負傷兵がどんどん運ばれて来る。看護の仕事に変わる。私は第二外科勤務となった。包帯の巻き外し、患者の世話一切だった。悪臭の漂う壕の中で勝利の日を信じ頑張る。死人運び、飯上げ等、危

険な仕事も多かった。

五月二十五日南部撤退、ぬかるんだ道を夜通し歩いて行く。南部に着く。生徒全員収容出来る壕がなく、第二外科は糸満の糸満部落に落ち着いた。(略)

六月十八日、第二外科壕が敵に馬乗りされ、銃弾が打ち込まれた。その晩解散命令が出た。なぜ？今までやって来たことは何だったのか、怒りが込み上げる。

「悲惨な沖縄戦」より

：軍医が後退して炊事係が残り、残った米を全部炊いて、大きなザルに大きなおにぎりが山盛りもられ、食べたいだけ食べろと言われ、更に乾パンも一袋ずつくれた。私は、死ぬときだけでも腹一杯食べようと思い、おにぎりを九個食べた。皆が私の食べっぷりを見ていたと見えて、誰かが「お前よく食うな」と言うと、皆がどっと笑いだした。あれがあの人たちの最後の笑いであつただろう。

：二日後に中隊に帰ったが病院はなく、負傷兵はそれぞれの中隊で管理しなければならぬ状況だった。

六月十七日六中隊が最後の戦闘に出て行ったが、帰った者はなく、残ったのは軍医と負傷兵だけとなった。

二大隊も戦える者は全員戦闘に出て行ったきり帰って来なかった。

負傷兵たちは動くことができず、穴の中でジーと敵に見つからないように耐えて居た。死ぬ者は死んで行った。

「生きていてよかった」より

道北澄子 (和歌山県)

\* 傷病名 : ..... 右大腿部貫通銃創兼盲管銃創兼左大腿部複雑骨折盲管銃創  
\* 受傷年月日/場所 : 一九四五(昭和二十)年五月二十日 ビルマ(ミャンマー)

：赤十字救護看護婦は戦時、平時の区別なく又彼我の別なく、一視同仁の使命を全うする義務がある。その教育は、看護教育、一般教養、朝六時の点呼、夜九時の点呼迄身にとけ込む迄の厳しい教育であった。

昭和十八年十一月三日、和歌山駅出発、出発に際して師範へ行かせた両親であったが、厳しい教育を習得して戦地へ出る娘に、「家名に傷つけない様に」ベルが鳴り出すと涙を流し「生きて還送る様に」と手を握った。側で婚約者が「征かせたくない」とくり返した。私は南方で高い使命にご奉公出来る希望にもえて赤いタスキをはずして振った。

十一月六日、輸送船アラビヤ丸に乗船、船内は二階区切り五人体が重なっている状態、寝具なく、制服の上に救命胴衣をつける。十一月十一日、朝鮮海峡に敵潜水艦の出没の予報ある中、小倉港出港、翌朝、魚雷の攻撃あり。後方の一隻撃沈、生存者なし。

「救護看護婦の受傷」より



## 植原 桂

(群馬県)

\* 傷病名 : ..... 左顔面顴骨骨折砲弾創(左眼障害)

\* 受傷年月日/場所 : 一九四五(昭和二十)年一月十二日 パラオ本島

…意識を失ってしまい、夜までジャングルの中で過ごしました。戦友達が「植原、病院へ行くぞ」と声をかけたので一時意識が戻った。暗闇を運ばれる。又意識がなくなったが、途中で戦友が転ろび、私は担架から降り出されて、意識が戻った。夢の中で奇麗なお花畑の中を通っていたのと思った。野戦病院へ着いたのを知らなかった。(略) 軍医殿が「包帯をとれ」と言い、衛生兵が私の包帯をとったが、軍医殿が「これはだめだ」と言って立ってしまおう。衛生兵が「軍医殿息をしているから」と言ったので、やっと治療してくれた。この野戦病院はジャングルの中の立木に横木

をしぼり、ヤシの葉を屋根に乗せ、枯草の上にシートを敷いた上に寝かされていた。夜蚊に刺されるので草の葉で体をはたくのだ。寝ていると顔の傷の上に鼠が乗って血を吸いに来たのか、「ああ鼠」と私が言うともわりの患者がその鼠を奪い合って生で食べる。俺が見つけたんだからくれと手を出してもくれない。

「おじいちゃんの顔の傷」より



### 三浦久良 (千葉県)

\* 傷病名 : ..... 左眼迫撃砲弾破片創

\* 受傷年月日/場所 : 一九四四(昭和十九)年 中国湖南省

：秋も深まった十一月上旬のある日、中隊長が部屋を見舞って下さった。中隊長は、「傷は治ったろう俺達は塩輸送の為茶陵に来た。今日帰るが貴様も退院して帰隊しろ」と言った。

自分は未だ眼の治療を受けていません。と言うと中隊長殿は、「眼は片眼見えれば充分だ。腐らなくて良かった」と言うことでその日のうちに退院し部隊へ帰った。小隊長に申告し分隊へ帰ると、皆喜んで迎えてくれた。

：中隊で過ごすうち十二月一日、南京第一六四五部隊に入校を命ぜられた。今迄幾山河共に戦って来た戦友や愛馬に別れを告げ再会を誓い、一路南京を目指した。

衝山より奥漢線を下り長沙岳洲を経て武漢に着き、そこから船で十二月末南京に着き入校した。中国全土から集った候補生は皆きちとした服装をしていた。

一線の将校は作戦出発時に着ていた服を一年後の今も着ている。食糧も戦地とは大違いだ。今も戦っている友達を思い腹が立った。

「戦争体験記」より

：朝食後、三十分位して病棟前に停めてある幌馬車の様な形のトラックに担架に乗せられたまま積み込まれた。トラックの荷台は角材を組んで上下二段に仕切られ私はもう一人の内科患者の兵と並んで上の段に担架を吊られ、下段には装甲車に腰骨を輓かれ重症という兵が吊り下げられ両側には四名の看護兵が付き添っていた。車が道路に出たときから地獄は始まった。路面は石ころとでこぼこばかりの悪路だった。その上を走る車はクツクツの悪い軍用トラックである。当然車体は上下左右にバウンドする。その都度私の骨折した肢も跳ね上る。副木を当てたといっても振動は伝わ

る。激痛が頭の先までひびき耐えるのに全身汗びっしょりになった。事態はこれだけではなかった。我々の下に吊られた重症兵が苦痛に耐えかね絶叫し始めたのである。「車をとめてくれーッ」降りしてくれーッ」「助けてくれーッ」と断末魔の叫びだ。つき添いの看護兵がオロオロ声で「もう直ぐ駅へ着くからのう：辛抱してくれよう：頑張ってくれえよう：」とただめるが叫び声は強くなるばかり(略)まさに一時間ばかりの地獄行路であった。

「二度の地獄」より

### 三浦 一夫

(宮城県)

\* 傷病名 : ..... 右肘関節盲管銃創左大腿部銃創

\* 受傷年月日/場所 : 一九四五(昭和二十)年五月二十日 長崎県第五十八重川丸

：甲板で指揮をとっていた私は銃撃で右肘関節盲管銃創並びに左大腿部銃創によって倒れ、顔面擦過、右腰臀部に破片が入り、服は血だらけ右腕は動かず、船上は死体と負傷者で無残な光景だった。空襲解除になるや(略)代船で長崎港に向かう。船内は負傷した兵隊や軍属が、のどの渇きや傷の痛みを訴えるうめき声で狭い船室は文字通り七転八倒の苦しみ「脱脂綿に浸した水分を吸いがまんしろ、茶碗の水をそのまま飲んだら死ぬぞ」と気合いを何回も入れておった。何時間たったか、一人の軍属が「教官殿俺は死んでもいい」と言いながら、衛生兵が持って歩く茶碗の水をグ

イグイとのどをならして飲みほしてしまった。ほんの一瞬のことであり、加えて負傷者だけで止めることはできず、長崎港に着いた時には帰らぬ人となっていた。あとでわかったがその軍属は、網地島出身とか「故郷に帰れたら、島に来てください。生きのいい魚でのみましよう」と言った笑顔が頭から離れなかった。

「戦中・戦後の労苦を振り返って」より

：救助されてからどれくらいたったのか、ふと気がついた時はベットの上であった。：「三日間意識不明だったのですよ。生き返って本当に良かったわ」と白衣の人、俺は三日間死んでいたのか、釜山陸軍病院での最初の実感でした。

：この間忘れようにも忘れられないことがありました。病院の入口で「保平長三はまだ生きておりますか」と言う声がしました。声の方を見ると何と紙切れを握りしめた父親が立っているではありませんか。私は自分の目を疑いました。それはあの紀州からはるばる空襲の激しい中を列車と船を

乗り継いで朝鮮まで来てくれるなんてとても考えられなかったからです。手にしていた紙切れは当院から打たれた「チョウゾウキトクダレカコレルカ」と言う電報でした。この時程親の有り難さと自分の親不孝を感じたことはありません。父は翌日帰りましたが、その時「手の一本くらいなくなっても生きておれば良い事があるから」と言った言葉が胸に響きました。

「真実に基づき本質を見抜くために」より

…伐採作業を経て、十一月上旬には、カルパチヨフ駅で木材の貨車積み作業に従事し始めた。…

…無我夢中で作業を終えて大地に飛び下りたとき、初めて両足の異常に気がついた。両足が完全に感覚を失っていたのである。歩くたびに、バリバリと凍りついた靴下のはげる音が響いて、これは相当やられたなと覚悟した。

十分余りで宿舎に帰り、戦友から靴をぬがせて貰ったら、両足とも、くるぶしより先の甲、指はすべて凍結していた。そして、次第に融けるに従

って、ゴクン、ゴクンと血液がまわり始め、痛みがひどくなって下半身が驚くほど腫れ上がってしまった。医務室へ入って熱を計ったら四十度を一、二度超えていたため、衛生兵が頭を冷やしてくれたのは感謝にたえなかつた。

その日、凍傷患者が多く出たため、薬を付けて貰えなかつた左足は、指の関節から先がひからび始め、死臭が漂うようになった。…

「人生を明るくする再出発点となった陸軍病院」より

戦傷病者とその家族の労苦を伝える

「搬送、戦時下の療養生活」





小林 健吾 (長野県)

\* 傷病名 : ..... 左手顔面爆創(左腕関節より切断)

\* 受傷年月日/場所 : 一九三七(昭和十二年)九月三十日 満洲牡丹江省

：牡丹江の陸軍病院から新京、大連、大阪、松本の陸軍病院に転送されてくる間は左手を切断された重症患者ということ、大切に扱っていたとき、風呂に行く時などは隣の患者さんと一緒に行き背中を流していただくのは当然のように考えていたが、東京牛込の臨時東京第一陸軍病院へ転送されると、全国の病院から義手装着のため重症患者が転送されて来ており、私など軽症で、大日本国防婦人会のたすきを掛けた皆さんが見舞に来て下さり、どちらをおけがされましたかと問われると、軽症できまりが悪くて、トイレに行く振りをして病室を出るのが常でした。

：或る日風呂に入ると、私より少し腕の短い人が、悪い短い腕に手拭の片方の端を縛りつけて背中を流していた。ああこれだ、究すれば通ずるといふ諺がある。不自由だ不自由だと考えているだけではだめだ、不自由だと百回唱えても不自由は消えない。積極的に克服することだという事を悟る事ができた。

「手を失って得たもの」より

：戦場で片足を失い、その時、もう俺の人生は終わったと、一瞬思ったりした。

：全く生きる希望を無くしたが、東京第一陸軍病院第十三外科病棟、軍医(大尉)の教育薫陶を受けて「生きることの尊さ」を知った。

まず自転車から始まり、当時の陸軍外山学校の運動施設の全部を使って、野球、卓球、バスケット、水泳、プールに飛び込み水球、そして岩登り等、大尉の諭す「義肢に血が通うまで。」の血の訓練で白の運動服のズボンの義足装着部分にも、足の切断面にも鮮血の消えることはなかった。

：今も思う軍医の言葉「足が駄目なら手を使え、手足が駄目なら口を使え、人間の身体足りない所あれば残ったところで補充する。要は工夫と努力だ。」と教えられた。必勝の信念は忘れない。でも人に勝つことは考えない。負けないということを信念として正常体の人が出来たら俺も出来るはずと頑張っている。

「足が駄目なら」より



## 浅井 義信 (三重県)

\* 傷病名 …………… 眼部砲弾破片創右眼亡失

\* 受傷年月日／場所 …… 一九四二(昭和十七)年 シンガポール

…入院中二十回に及ぶ手術もさることながら、私にとって一番辛かったことは、受傷時、両眼失明同然の状態で、全く二か月間、暗黒の世界、手探りの日々が続き本当に耐え兼ねた。でも三年間の療養中親友(同期)が戦盲で苦しみぬき、遂に半年目頃から乱心狂気の状態となり、いかに親友、主治医でも慰めの言葉がなく、苦心惨憺でした。戦盲患者の一度は辿る宿命だと聞かされたが、その苦しい日々の一挙手一頭足を三か年見てきた私は、その苦しみ心痛が、少々は判るようになりました。本当に、たった二か月間の私の苦しきなど問題でないことを初めて知り、恥ずかしく思っ

た。

このように私よりも遥かに深い深い、痛手をおった気の毒な両手、両足切断の胴体だけの患者さんとも(同じ戦場の友)三年間交流してきたが、本当に傷つき斃れ、千金を積んでも買えない尊い数々の体験や見聞が私にとっては今、何よりの宝物であり、財産だと思っ感謝しております。

「平和の尊さ」より



山上 幸太郎 (東京都)

\* 傷病名 …… ハンセン病

\* 発病年月日／場所 …… 一九四一(昭和十六)年一月 中国山西省

…昭和十六年一月、前夜より、腰痛、両足首激痛で診察をうけ、数日間練兵休、最初の診断はカッケではないかと言うことでした。痛みは消退せず、益々加わって来たので、二月、陽城第四十一師団、野戦病院、患者収容所に収容され、再診の結果、ハンセン病と決定しました。それから野戦病院を転送々々で後送されましたが、ハンセン病と決定したとたん、私に対する処遇が一変し、衛生兵、看護婦とも、食事、便器の世話など一切やってくれず、特別扱いをうけました。

…七月十五日、下士官、衛生兵の付添で、東京都東村山市(当時は東村山村)国立療養所多摩全生園に移りました。全生園では早速入浴させてくれました。思えば昭和十五年十二月二十日頃、野戦のドラム缶風呂に入ったきり、多摩全生園に入るまで入浴させてくれませんでした。約半年以上です。…私たちハンセン病に罹患した者への対応は、その偏見差別は、それはそれは厳しいものでありました。

「偏見・差別・迫害」より

…母と妹が面会に来てくれた。(略) 妹の話では私の代筆の手紙を見た時兄ちゃんの字とは違うと言ったそうだが母はいや兄ちゃんの字だと言いつた。たとえば代筆と分つても手をやられて書けないのだろうと思つたと言ひ夢にも両眼とも失明していようとは思つていなかつたそうだ。

…退院を間近に控えたある日、私の将来について関係者との面談があり「今は医者が少ないので鍼、灸、マッサージ師になったら」とのこと、私もそうしようと決心した。その頃病院に盲学校を卒業した人が居て学校に行くようなら今のうちに少しでも点字が読める様にとアドバイスをしてく

れ点字の本をもらう。点字は書くのはすぐ覚えるが読むのは指先の感覚で読むのだから年をとればとる程難しいとのこと、私は何度も何度もその本をなぞつて読むけいこをした。おかげで段々読める様になる。その為後に盲学校に入つても大に助かった。先生の話では途中失明者の中にはとうとう読めずに卒業する者も居るとのことだった。

「失明して」より



熊澤 正信 (愛知県)

\* 傷病名 : ..... 左大腿部骨折貫通銃創

\* 受傷年月日/場所 : 一九三八(昭和十三年) 中国山西省

：三月二十日、軍医の最終診断があり、これ以上治らないとのことで、三月二十三日徐役退院となる。村の人達は尾張宮の駅迄出迎えてくれた。退院しても治療せねばならない、働き場所もない、生活力もなく、結婚も出来ない。三男であるのでいつ迄も実家にはおれない。針の上にすわっているようなつらい毎日でした。熱田造兵廠熱田製造所で夜勤の検査工として九十日間通勤したが、天気の良い日など関節の痛みがひどくなり白浜療養所で六十日治療に専念する羽目になり、今後の生きる道を見付けねばと思い、昭和十六年七月、国立大阪傷痍軍人職業補導所機械製図に入所。治療

しながら製図に専念。昭和十七年十二月二十五日卒業し、昭和十八年一月三日よりN造船株式会社設計課製図手として採用され、ようやく生活のめどがたち七月十八日、結婚できた。社宅を借りて新婚生活に入ったが、名古屋では敵機の空襲が次々あり、死体が何千人も道路橋の下などにあり、目のやり場のない程の光景でした。

「最後の花道」より

友保たきゑ (岡山県)

夫の氏名  
友保為義

\* 夫の傷病名 …… 右上膊複雑骨折による右上膊切断  
\* 受傷年月日/場所 …… 一九三九(昭和十四)年 中国河北省

…昭和十七年二月、勧める人があつて傷痍軍人の夫と結婚しました。

右手がないのだから苦勞するよ、と言われましたが、当時は傷痍軍人と結婚することは名譽のことであり、夫を助け右手になろうと堅い決心で嫁ぎました。

昔から農家では嫁を貰うと手間が増えたと言ひ喜ばれる風習がありました。いわゆる労働力が増えたということ、貴重なたらき手が一人増えたということ、です。

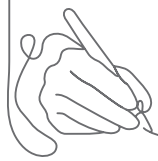
かなりな田、畑を耕作しておりましたので、両親について一生懸命食糧増産にはげみました。

…結婚して半年余りは、傷痍軍人だからと言うことで、受けもよく部落の寄り合いや、結婚式や葬式等にも、進んで出ておりましたが人並みの作業は出来ず、時には嫌味を言われることもあり自分に引け目を感じてか出ていくのを嫌がるようになりました。それから総て私が代理を努めました。部落作業では男の人に敗けてはならないと一生懸命働きました。

「涙ながらの二人三脚」より

戦傷病者とその家族の労苦を伝える

「家族とともに」



千葉ノリ子 (岩手県)

夫の氏名  
千葉正信

\* 夫の傷病名 …………… 右眼視神経萎縮  
\* 受傷年月日/場所 …… 一九四〇(昭和十五年)年十二月十二日 中国山東省

：戦争が終り夫は働きたくとも目が見えず、社会に出て働くことは出来ませんでした。又、農家の二男坊ですが、働く土地もなく、行商を始めました。実家の母に長女をあずけ、重い荷物を二人で背負い夫の手を引いて行商したのですが、それは大変でした。

昭和二十一年マッカーサーの命令で土地改革が行われ、原野でも手に入ると聞いて借金をして土地を手に入れ、そこに小さな家を建て開墾を始めました。夫の手を引いて原野に行き私は木のまわりを掘り、夫はその木の

根を引っ張って掘り起こすのです。その頃私は二女を身ごもって居りましたので、それはそれは大変でした。今でも、夫は木の根っこ掘りは大変だったと申して居ります。それでも自分達の土地だと思おうと苦労を苦労とも思いませんでした。

：子供を背負っての夫の介護と畑仕事は大変でした。自分ながらよくやっただと思います。病院の支払いは医療扶助でしたが、ペニシリンは認めてもらえず牛を売って支払いに充てました。

「夫を家に残して出稼ぎ」より

：家は広島と岡山の境の山間部で農業をしていた。近くに分家をさせ農業をと考えていたようですが肩は貫通で痛く耳も不自由のため好きな百姓もあきらめた。丁度ラジオで戦傷痍者職業訓練所のことを聞き上阪し一ケ年間洋服仕立科に入所する。食糧事情が悪く大変難儀をする。次の年共同作業所で働き、その次の年は大丸の洋服仕立部の下請会社に就職する。

(略) 昭和二十五年五月正月結婚のため田舎へ帰っている間に会社が倒産していた。次にP Xの洋服仕立修理、クリーニング等の下請会社で働く。朝早く天王寺駅から迎えの進駐軍のトラックでそごうのP Xまで運んでも

らう。進駐軍の食堂ではコーヒーはいくら飲んでも無料だった。サンドイッチにする食パンの切片は捨てる前に袋に入れてもらって帰った。近所の子供等も食べ物に困っていたので、もらった切片を上げてよろこんでくれた。(略) 五〇年余り前、戦中戦後食糧一つでも日本とアメリカの差に驚き、こんな国と戦っていたのかと感じた。

「傷と職の苦勞」より



山中アキ子 (大阪府)

夫の氏名  
山中國造

\* 夫の傷病名 : ..... 右大腿部切斷  
\* 受傷年月日 / 場所 : 一九四四 (昭和十九年) 中国広西省

：その頃の義足と言えば鉄棒を付けていると言うだけで誠に悲惨な姿で、元気で出征した時のことを思い、残念で残念でつい涙をこぼすこともありましたが、戦死者のことを思えばと元気を出しておりました。職業に付くことも出来ず、これからの生活を考え、一時は私が米軍のキャンプへ働きに出ようかとも考えましたが、子供を抱えてそれも出来ず、色々考えぬいた結果、自分の命の果てるまでは夫の手脚となって、苦楽を共に出来るのは、元の商売を復活させるより他に道はないと決心いたしました。それか

ら夫と力を合わせ (略) ようやく生活の目途がつくようになりました。けれども、当時人通りの多い町の道すがら神社仏閣の参道等に、白衣の傷痍軍人が人の情を請う痛ましい姿を見るたびに胸を抉られる思いがいたしました。戦時中は戦死者や戦傷者は御国の為にと讃え励ましたものですが、敗戦後は夫のような傷痍軍人など汚い物を見るような目で見られ、残念で仕方がありませんでした。

「戦中・戦後の体験記」より



川上アキ子 (長崎県)

夫の氏名

川上長作

\* 夫の傷病名 …………… 片腕切断

…ある方の紹介で戦傷者であるという事を承知で主人と見合いをした。

…昭和二十一年二月二十八日、職なく、腕なく隻腕との二人三脚の線路はしかれ、いばらの道を歩き始めたのである。

夫の実家も戦災で丸焼けで親から何一つ貰う物もなく、着のみ着のままだった。新婚の甘さなどどこを見ても掘だそうにもなかった事を記憶している。

…昭和二十四年十月頃突然に白衣の姿で陸軍病院で一緒だったAさんの来

訪をうけた。政府が何も援護してくれないから自分たちで街頭募金をしてるので、参加するように誘い来たとの事に、夫は大分悩んだが私もけしかけ、重い腰をあげ、全国を旅する生活が始まった。かつては白衣の勇士として称えられし戦傷者も敗戦により街頭へ身をさらさなくてはならぬ程、当時の日本の政治はだめだったのだ。白衣の勇士の自衛手段に誰が文句を言えただろうか。

「白衣の妻となりて」より

回測 治二 (滋賀県)

\* 傷病名 …………… 左前膊切断

\* 受傷年月日/場所 …… 一九四四(昭和十九)年六月三十日 中国湖南省

…こんな体で生きて行けるだろうか―、今後どうなるのだろうか？重い足を引きずり八日市駅に降り立った時、行き交う人々は片腕の無い私を振り返りながら過ぎて行く、やっと探し当てた母の疎開先、母は私の姿を一目見るなり絶句し、その顔は涙にぬれていた。

ひとまず落着いてからも母は、私の後ろ姿を見ては泣き、寝姿を見てはそっと目頭を押さえていたと言う。幸い田舎の町、食べ物は何とかあったようだが、時々街へ買い物に出ると、雑踏のなかで私の義手が通行人の衣服に引っかかり、罵倒を浴びせられたり、また、「あなたの腕は交通事故

ですか―、工場での怪我ですか？」と聞かれ、「戦傷です」と答えると、「沢山お金貰っているのでしょうか」と言う冷たい視線に耐える日々、次第に昂じてくる自己嫌悪か、商店のウインド硝子に写る我が姿を、見るのも嫌で目を閉じて走り抜ける惨さ、これでいいのだろうか、何とかしなければ、悶々とする日が続き、自暴自棄の毎日でした。

「花と生きる隻腕のど根性」より

：終戦後、自動小銃を持ったソ連兵が侵攻して来た。事務室に居た関係で、一番初めに銃をつきつけられ、時計、万年筆を取り上げられた。下手に反抗すれば命がない、言われるままにするしか方法はなかった。

病院から三回か四回に亘り、シベリヤに連行された兵も二百人余り居たと思う。北満から来た兵は殆どが病気だったので、外見は判らないので、胸部疾患の人が多かった。シベリヤに連れて行かれてどうなったか、無事帰還された人がどの位居られるのだろうか、今でも胸が痛んでならない。

：四月頃になると食糧も底をつき、一日の食事が馬鈴薯五、六個の塩炊きしたもので食い繋ぐ事もあった。腹が空いても、どうする事も出来ないのだ。栄養失調になる者も出る始末であった。

発疹チフスになり死亡した兵の遺体も初めは、昨日一人、今日は二人という程で、病院の横の空地に埋葬して間に合わせたが、その後毎日の様に四人、五人と増え、車(荷車)で運んで埋葬しなくなかった。

「戦地における受傷の記録」より



伊藤 テ子 (岩手県)

夫の氏名  
伊藤 幸太郎

\* 夫の傷病名 : ..... 右股関節炎  
\* 発病年月日 / 場所 : 一九四六(昭和二十二年) ソビエトカルカンダ

：夫は、そのような世情の夏。毎日待ち続けていた私のもとへ、ヒョッコリ帰ってきました。

：力なく横たわり、只昏々と一か月近くも深く眠り続ける夫の姿を見てみると、あの晴れやかに出征した時の堂々たる勇姿で、陛下の一兵卒としてと、瞳を輝かせていた人が、こうも瘦衰えるまでの苦労の数々が、思いやられ、ソビエトのカルカンダでの捕虜生活の辛さや、鉾山の坑内での強制労働の過酷さが偲ばれて、可哀そうで愛おしくて、この人を、このまま死

なせてなるものかと、必死で昼夜を嫌わず、夢中で生活に明け暮れました。

：その後も体力の快復は、はかばかしくなくて、ようやく座敷に床を移せるようになって、病状は一進一退で、内臓すべてが弱りきっており、腎臓の次は肝臓に、胃にと、毎年毎年が、入退院の繰り返しで、病院通いの絶えることのない歳月を送りました。

：他家の嫁さんたちが、健康な夫君と一緒に働いておいでの姿を目にする  
と、羨ましくてなりませんでした。

「時の流れ」より



下松 京子 (福岡県)

夫の氏名  
下松 貞二

\* 夫の傷病名 …… シベリア珪肺  
\* 発病年月日/場所 …… ソウイェト連邦シベリア抑留中

…夫は結核ということでもストレプトマイシン・パスという肺病の強い薬が投与され、六か月もせぬ中に肝臓をやられ、黄疸がひどく、肌着まで黄色く染まっただくらいです。十か月近くなると「化学療法では効かぬので肺の一部を切らせてくれ」と言われ、右の肺上一部分を切り病理研究室へ送られました。ところが、粟粒結核と診断されていたのは鉛の塵であったことが判りました。その上手術後、輸血による肝炎になったり、薬の副作用で耳が聞こえにくくなったりで、退院するまでには一年という月日がかかり

ました。(略)

それから六年目のことです。毎日新聞の朝刊に「シベリア珪肺」について記事が掲載されました。鹿児島大学の縄田博士が発見されたとのこと、記事のような症状のある方は申し出るようにとありましたので、早速新聞社に電話しました。すぐ取材に来られ、「シベリア珪肺」が旧軍人の傷病恩給の対象になるとのことでした。けれど会社に戻れて働ける身だからと尊い税金で支払われる恩給の申請は、会社を退職するまでしませんでした。

「シベリア珪肺」の夫と共に」より



## 小澤 茂

(鳥取県)

\* 傷病名 …………… 肺結核後遺症

\* 発病年月日/場所 …… 一九四六(昭和二十二年)十月復員後

…昭和二十一年七月復員して、三ヶ月経って十月の初頃から体がだるく、微熱が出るようになってきた。そこで米子市の赤沢医院で診察して貰うと肺浸潤と診断された。それで仕事を休み、一日二キロメートルの散歩をし、後はぶらぶらして毎日を過ごした。

米子の医院へ月に二回ぐらい通っていたが、次第に痩せて体重は十四貫(約五十二キロ)になっていた。

昭和二十二年十月十七日の朝、突然ミルク缶一杯ほどの大量の血の喀血があり吃驚した。熱も四十度位に上がり、喀血も五日間続いた。医者に来

診して貰い、カルシウムの注射を受けた。喀血は止まったが、毎日四十度の熱が続くので、二階に上がり本格的な療養に入ることになった。

当時、不治の病と恐れられていた、肺結核に効く薬はなく、大気安静が一番よいと言われていた。冬になれば顔に雪が舞い落ちるなど、風の取り入れを自然に任せる開放という今では考えられない療養だった。

「闘病」より



松本 義夫 (石川県)

\* 傷病名 …………… 左腰部盲管銃創による下半身麻痺

\* 受傷年月日／場所 …… 一九三七(昭和十二年)九月二十九日 中国大平山

…東京第一陸軍病院で一年余りたって、起上る訓練や車椅子にのる訓練にはいったが、長い間寝たきりで体の筋肉が退化しており、痛みに耐えながらまず筋肉の力づけから始まったが、これを取り戻す努力はただ事ではなかった。どうにか車椅子に乗る事は出来る様になったが、着換え、排便、入浴等は出来ず生きる事を半分諦めかけていた。

…見舞いに来てくれた父母や親戚の者は、哀れの眼差しで慰めるだけであったが、父は腰をさすり、ブラ下った両足をなで、少しでも良くしてやりたいと言う思いがアリアリと感じられた。

父は私の入院中、分家させ、最低食って行ける様に、借金をして家を建て、日用品雑貨食料品の店をつくっている事を聞き、親の愛に涙を押さえる事が出来なかった。

…幸い地元から嫁を貰う事も出来た。この妻は私の介護や店の切り盛りにより毎日汗水を流している。只感謝のみである。

「下半身麻痺となり恩返しできなかつた亡父母へ」より

中山 敬一 (静岡県)

\* 傷病名 …………… 左大腿中央部切断  
\* 受傷年月日/場所 …… 一九三七(昭和十二)年九月二十五日 中国江蘇省

：手にしろ足にしろ切断した者は、切断端の神経が或る日突然痛み出し、之は何のきっかけで痛み始めたのか医師にも解らないと聞いている。若い頃は、二ヶ月に一回位大体どういわけか夜始まる事が多く何の徴候もなく急に神経が痛み出し、又その痛みは全身硬直する思いの痛みで三、四分にて治まり又始まる。之を繰り返し約三時間位続きだんだん度数が遠のき又痛みも軽くなり終る。当時、医師に相談したが確たる答えは頂けなかった。又薬も麻酔薬故あまり使用しない方がよいと言われ、痛みが始まっても治まる迄我慢して通したものである。

：隻脚となって六十年、当然体に故障が来るのは当り前であるが、レントゲン撮影にて、背骨が曲がっていて腰の骨が変形して、首と背骨の境の骨が変形して、膝の軟骨に異常ある由等々異常な箇所許で、長年の義足生活にて体のバランスが平常でなく、その為シビレ等が起り、シビレが昂じて足の感覚がなくなり倒れてしまう。

「戦地における受傷状況と今も続く精神的苦痛」より



利根川 廣 (埼玉県)

\* 傷病名 : …………… 肺結核カリエス

\* 発病年月日 / 場所 : …………… 一九四三(昭和十八)年六月 中国山西省

…それから二十年大過なく勤めて参りました。ところが、その二十年後に胸の病が再発したのです。折角社会復帰が出来てもう病気とはおさらばだと思っていただけに、まさに青天の霹靂でした。友人の薦めもあって今度は東京病院に入院しました。前には若さで何とか快復出来たが、もう五十を過ぎた老年だ。絶望的な気持ちだけが先立ちました。でも、それは杞憂でした。二十年前は試験的だった化学療法が功を奏して半年とか一年という短期間で若者たちが退院していく。そんな光景を目の当たりにして絶望は希望に変わりました。私の治療も見事に成功して一年三か月で退院し、

復職出来ました。

…南方の島々やフィリピン戦線或いはビルマのジャングルでご苦勞なされた人々、更に終戦後シベリアへ連行された方々に比べれば、病気の苦勞など贅沢の誹りを受けるかもしれませんが、病人には病人の苦勞があり焦りがあります。健康の有り難さは病気になってみないと判りません。

「再三の病を乗り越えて」より

…私達の頃は結婚式は家々で行なわれました。花嫁の家に行って式がはじまると「あいつは何と横着なやつだ、こんなとき正座もせずにあぐらをかいていやがる」とコソコソと話しているのが聞こえた私は、その時その一言が胸に深くつきささった。それ以来親類近所の慶事には一切いかず、妻を代理としていかせるようになった。

またあるとき、お寺にお参りしてあぐらをかいて仏様に礼拝していると、ある老婦人が「仏様を礼拝するときは正座するものですよ」と注意して下さいました。「私は戦争にあって負傷し正座出来ずこれが精一杯なの

です」と言ったら、その老婦人は「失礼なことをいってすみませんでした。たいそうご苦労なされたのにほんとうにすみません」とあやまられました。この老婦人は注意して下さいだったので理解していただいたのですが、他の何もいわれない人々は「正座せずして礼拝しお経をあげている。なんと失礼なやつだろう」と思っておられるのだろう、気をまわしています。

「あぐらをかいた新郎」より



## 足立 良彦

(岐阜県)

\* 傷病名 : ..... 左手腹部両下肢爆創

\* 受傷年月日 / 場所 : 一九四五(昭和二十年)年 福井県(敦賀通信基地周辺)

：二十九年には長女、三十二年には長男の二人の子供にも恵まれましたが、私の身体的特徴が子供なりに理解でき、友達に何か言われてもそれに言い返すことができるようになるまで子供の学校の行事にかかわらないようにして来ました。なぜなら、手のないことで私自身が受けてきた差別的な態度や言葉が、そのまま子供達のうえにかかってくることを恐れたからになります(私自身に言われる以上に、言われのない差別を受けることがたえられなかった)。長男が、高校に入学するころまで、外出時には、左手をポケットの中に常に入れて歩いていたと記憶しています。そのころ

を境にして、左手がないことを隠すことをやめました。精神的にも経済的にも他に引けを取らないという自信も十分にでき、差別的に見る世間の目に負けない子供に成長してくれたことに感謝しています。

「茶碗を持って食べたい」より



加納 静華 (熊本県)

加納 文次

夫の氏名

\* 夫の傷病名 …… 両眼失明  
\* 受傷年月日/場所 …… 一九四四(昭和十九)年九月二十六日 南大東島

…主人は失明に加えて人工的に作られた唇、歯ぐきもないので、物がよく食べられない。硬いものは一切タブー。(略)孫達と一緒に食事をしていた時、「アッおじいちゃんは、お手々で食べている」と孫がいった。あのね、おじいちゃんのお手々は、お目々なのよ、本もお手々で読むでしょう。あなた達は、見ればこれは何だと分るけど、おじいちゃんは、何でもお手々で見るのよ。といった所、主人の目と手を不思議そうに見比べていたが納得した様で何もいわなくなった。或日、突然主人が「俺が先に死ん

だら、三途の川までお前を迎えに来てやるよ」といった。大変有り難いけど、迎えには来ないで、あの世とやらでは、一寸私だけの意思で、私の足の向いた方に歩きたい、たとえ迷ってもいい、自分の行き度い方に、自分の足で歩いてみたい。人間が死ぬと、現世で失われたもの(目、手、足)全てが元に戻る、と聞いたことがある。もう手引きの必要もあるまいと思う。

「全盲でも」より



友岡 幸子 (福井県)

夫の氏名  
友岡 勇

\* 夫の傷病名 …………… 左腰部貫通銃創  
\* 受傷年月日/場所 …… 一九三七(昭和十二年)八月二十四日 中国上海

…雨の日や天候の悪い時は体がだるく、頭が痛むので、一日中寝こんでしまいます。又右足の靴は踵や靴全体に変形がはげしく、体重が左足にかけられないので、歩くのがとても速く、びっこを引き引き歩む後ろ姿はとても、ふびんで、出勤する姿に涙ぐんだものです。腰の神経がどのようなになっているのか、或は血管のつながりが不十分で血流が悪いのか現代医学の治療法でもう一度切開してみたらと申しましたが、今の年齢で痛い目にあうのは御免だといって聞き入れてくれません。又絶対に治おるとの保障も

ないのだからとて…。

後しばらくの人生故我慢しつつ生きて下さいと頼んでいる次第です。傷痍軍人会の集まり等で夫の歩く姿や座る姿を見て、妻の会の方達から、貴女の主人は項症かと思っていたら、二款症ですかと皆の方が驚かれます。…この様な夫を置いてあの世へ先立つことは絶対に出来ないこととて、何としてでも私が後に残らねばと日々頑張っておる次第です。

「傷痍の夫と共に」より

時田 民夫 (石川県)

\* 傷病名 …………… 右上膊切断

\* 受傷年月日/場所 …… 一九四五(昭和二十)年六月二日 スマトラ島

腕の傷が治って病院を出た私に、義手は有っても職は無い。元の職業は手が無くては絶対不可能な仕事であった。リハビリと練習の甲斐有って左手でも字は書けるようになってはいたが、学歴も才能も特技もない片腕の人間に何が出来よう。当時は国家補償も無く私はお袋に養ってもらう日々であった。

お袋は父が死んだ後、子供四人を抱えて生活と苦闘。女の細腕一つで野菜の大道商いをして、雨の日も風の日も道端に座って、一日も休まず働き通した。

私は若かりし人生の一時期、自分の片腕を呪って酒に逃れ、道楽遊びもした不省の子であったが、母はひとことも叱ることをしなかった。

二十六歳で諦めていた結婚も人並みにすることが出来た。その時女房はまだ十代、若くてほやほやの小学校の先生で、財産も無く片腕で安サラリーマンの私との結婚に女房の親達は大反対、女房は勘当書きを以て身一つで嫁いで来た。以来、五十年良く私に尽くしてくれた妻に心底から感謝している。

「片腕人生抄」より

## 戦傷病者とその家族の体験記

令和五年十月

編集・発行……しようけい館―戦傷病者史料館―

〒102-0073

東京都千代田区九段北1-11-5

グリーンオーク九段2階

電話………03(3234)7821

FAX………03(3234)7826

承け継ぎ、語り継ぐ。記憶も、痛みも。



# SHOKEIKAN しょうけい館

戦傷病者史料館

Historical Materials Hall for the Wounded and Sick Retired Soldiers, etc.

## 入館無料

しょうけい館は、戦傷病者とそのご家族等が戦中・戦後に体験したさまざまな労苦について、後世代の人々に知る機会を提供する国立の施設です。

入館料 | 無料 受付2階

開館時間 | 午前10時～午後5時30分

※入館は午後5時まで

休館日 | 毎週月曜日

※月曜日が祝日又は振替休日の場合はその翌日  
年末年始(12月28日から1月4日)



### アクセス |

● 地下鉄をご利用の場合

東京メトロ「九段下駅(東西線・半蔵門線)」7番出口より徒歩3分

都営地下鉄「九段下駅(新宿線)」7番出口より徒歩3分

● バスをご利用の場合

都営バス「九段下(飯64系統)」より徒歩4分

千代田区コミュニティバス「千代田保健所(九段下駅)」より徒歩5分

※駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。



〒102-0073 東京都千代田区九段北1-11-5 クリーンオーク九段 2階  
TEL.03-3234-7821 FAX.03-3234-7826 www.shokeikan.go.jp

